

2022年4月24日 「復活者イエス」 高橋克樹牧師

聖書 ヨハネ福音書20章19～31節

本日のテキストの前の1～18節では、マグダラのマリアが墓にイエスの遺体がないことをペトロや愛弟子に告げています。しかし、マリア自身は実際に復活したイエスと対面して話しても、『マリア』と自分の名前を呼ばれるまで、その方が復活したイエスだとは気づきませんでした。そのあとの20章18節で『わたしは主を見ました』と証言しているのですが、その「見た」（ホラオー）という単語は、復活顕現の最も古い伝承である1コリント15章4～8節で『ケファに現れ、その後十二人に（現れたことです）。次いで、五百人以上もの兄弟たちに同時に現れました。…次いで、ヤコブに現れ、その後すべての使徒に（現れ）、そして最後に、月足らずで生まれたような私にも現れました』で「現れる」と訳されている言葉と同一の単語です。

つまり、マリアが復活のイエスを「見た」というのは、実は復活したイエスがマリアに「現れた」ことなのです。これは1世紀末のヨハネ教会で、復活したイエスが現れていることを信仰の目で信じることができなければ、復活したイエスを見ることができなかったことを示しています。空虚な墓の物語は、単にイエスが復活した間接的な証拠として福音書に記されているではありません。信仰は、目で見えないものを信仰の目によって見るところから始まることを示した物語なのです。

問題は、イエスが死んでこの世的には不在になったことに対して、信仰的によどのように向き合うかが問われているのです。トマスの物語でも、自分たちにとって大切な存在であるイエスはこの世では不在であるということに焦点があります。この世的には不在であるイエスをどのように受け止めて生きていくかという課題が突

きつけられているのです。

古代人も現代人も、目に見えないもの、あるいは感知できないことを「存在しない」ことだと理解しがちです。しかし、人間の五感で感知できないことは、不在であるということでしょうか。でも、少し考えてみればわかることですが、見えなくても信じていることは私たち人間にはたくさんあります。たとえば希望がそうです。生きる意味を見い出さずに生きていくことは難しいからです。絶望が人間をして生きる力を失わせることをみても、私たち人間は見えないものに対してどういう態度をとるかで、大きく生き方が違ってくるのです。

私たち人間は今も昔も死者を封じ込めてきました。仏式の葬儀では顔写真に黒リボンをかけるのですが、あれは死者を封じ込めたというしるしなのです。封じ込めることで、死者は現世では不在だということを象徴的に表しているのです。イエスを十字架刑死で喪った弟子たちは、復活したイエスが現れたことで、復活したイエスは自分たちを生かす力を發揮し続けていると信じました。逮捕と十字架によって弟子たちはイエスを見捨てました。しかし、復活したイエスはガリラヤで再び会おうと告げてくれたのです。そして、イエスの死をめぐる悔恨と悲しみは、復活したイエスが自分の魂に働きかけてくれていると受け止めたのでした。内村鑑三も矢内原忠雄も愛する者を喪っていますが、それを単なる自分の悲しみとして受け止めませんでした。悲しみは慰めと希望をもたらす恩寵が訪れる前触れであるということ、悲しみを通して実感していました。悲しみを悲しみのままにしてしまうのは、死者の復活に出会う思想を失ってしまったからです。悲しみを惨めで慰めのない、救いのないものにしてしまうのは、見えないものを信じるということを見失ってしまったからなのです。

通常、愛する者を喪うような悲しみが無い人生がいいと多くの人は考えます。でも、悲しくて悲しくてどうしようもない、それほどに思える人に出会った人生は、

ある意味幸せなことです。悲しむことで、初めてその人の重みを知ることになるからです。そのような悲しみをイエスが十字架上で死んだことで、マリアやペトロ、愛弟子の3人は知ったのです。

イエスが復活したことをまだ信じ切ることができないなかで、彼らは家の戸に鍵をかけて身を隠していました。19節をみると、イエスが復活した日の夕方、弟子たちはユダヤ人を恐れて、家の戸に鍵をかけて隠れていたのです。ここでの『ユダヤ人』というのは、1世紀末のファリサイ派のユダヤ教徒のことで、彼らからの迫害を受けて内部に閉じこもりがちになっていたヨハネ教会の信徒たちの状況をこの物語は反映しています。この家に隠れている『弟子たち』は、1世紀末のヨハネ教会の信徒たちを象徴しているのです。しかし、復活したイエスは家の戸という障害物を何の苦もなく通りぬけて弟子たちの真ん中に立ち、『あなたがたに平和があるように』（原語では端的に「あなたがたに平和を」と言うのです）。

これは当時、ユダヤ教の宗教的・政治的自治組織であるサンヘドリンの管轄下にあったシナゴグのユダヤ教徒からの迫害されていたヨハネ教会への励ましの意味があつたのです。当時圧倒的に少数者であつたキリスト教の信徒たちに対して平安（平和）を祈つて宣教の業へと派遣する意味合いが、この「あなたがたに平和を」というイエスの言葉の背後にはあるのです。

さらに興味深いことは、20節でイエスは手と脇とお見せになります。これは地上のイエスと復活のイエスが連続性のなかにあることを示すものです。手には釘の跡があり、わき腹には槍に刺されて血と水が流れ出た刺し傷があつたのです。十字架にかけられたままのイエスが復活の主として弟子たちの目の前にいるのです。十字架の傷跡を見せることは、16節でイエスがマリアの名を呼んだあとで彼女の悲しみが喜びに変わったように、弟子たちにとってイエスが失われていないことを

証し、弟子たちに喜びを与えることとなります。これは『(あなたがたの) 悲しみは喜びに変わる……わたしは再びあなたがたと会い、あなたがたは心から喜ぶことになる』(16章20〜22節) と語ったイエスの約束の成就です。

21節では宣教命令がなされます。ここでは父なる神が「遣わす」(アポステロ) という語と、イエスが「遣わす」(ペムポー) のとでは、原語が意識的に異なる言語が使われています。ペムポーは多くの場合、神とイエスの一致を表すのに用いられてきた言葉です。つまり、ここで復活したイエスは弟子たちを派遣するのに際してペムポーを用いるのは、聖霊を受けて派遣される弟子たち(ヨハネ教会の信徒たち)がイエスから離れて遠くに派遣されるのではなく、派遣された地においてもいつも共にいるということを示すためです。また、宣教派遣の命令は、神が委託した使命を教会が引き継いでいることを明確にするためでもあるのです。この宣教命令では、復活者イエスを世に伝えていくことが福音になるということが強調されています。そのためにイエスは聖霊を授与するのです(23節参照)。22節『息を吹きかける』(エムフユサオー) は新約聖書ではここにもみ登場する語で、訳としては「吹き入れる」がふさわしい。創世記2章7節で神が最初の人間に息を吹き込む描写を想起させる表現です。これは第二の創造を意味しており、聖霊を受けることは新しく創造されることなのです。

私たちキリスト者がイースターを祝うのは、復活したイエスが私たちの人生に聖霊をもつて働きかけてくださることを通して、私たちが新たに創造されつつづくからです。イエスの復活が初穂となって、私たちがたとえ罪を犯したとしても、キリストの贖いゆえに、新たに生まれ変わらせてくださるのです。この恵みを覚えて、復活したイエスをほめたたえましょう。